

雁塔聖教序記碑と玄奘法師

塚田 康信

唐代の都城、長安の南東（現在の陝西省、西安市の南約四キロ）にある大慈恩寺の境内に、いまもなお古塔が高くそびえている。すなわち四角七層で、各層に短い周檐をめぐらし、上層にゆくにしがたがって通減された、高さ六四メートルの莊重で安定感のある素朴なこの碑塔を、古くから大雁塔とよんでいる。

この塔の初層南面にある門の左右に高さ約三三〇センチ、深さ約一六〇センチの龕を設け、向かつて左の龕の後壁にそつて太宗の「聖教序」を、褚遂良の楷書によつて黒大理石に刻した、いわゆる「雁塔聖教之序」とよばれている名碑が収蔵されている。右の龕の後壁にそつて高宗の「述聖記」を同じく褚遂良の楷書によつて、序碑と同形同大の黒大理石に刻した、「雁塔聖教序記」とよばれている碑石が収められている。

この「雁塔聖教之序」および「雁塔聖教序記」と大遍覚と謚された法門高德玄奘法師との関係、兩碑の建立、形態、あるいはその書の特徴や書風などの考察を深め、さらに金石の刻文やその拓本は、文字や書、書道史や書道教育の研究に欠くことのできない資料であ

り、また現在こうした書的基本的な研究が、いかに重要であるかということを明らかにしたい。

古都洛陽の東方、黄河の南、嵩山の麓ちかく（今の河南省偃師の南）にあつた蔡氏城の東郊に陳という名家があつた。玄奘法師は、この名家の四人兄弟の末子として、隋の文帝仁寿二年（六〇二）に誕生し陳禕といつた。一〇歳のとき父を失つたので、そのころすでに洛陽の浄土寺にいた兄の長捷法師のもとに迎えられた。生來讀書を好む性質であつたので、浄土寺において仏典に親しむようになったのは、むしろ当然のことであつた。

一三歳のとき、鄭善果という「度」の志願者の人選役との奇縁によつて、陣禕少年は法名を玄奘といひ僧籍に入ることを許された。一八歳のころからは、特に成都（今の四川省、省會所在地）城内の空慧寺その他で仏教の研究に没頭し、二三歳のとき長安の大覺寺で道岳法師から俱舍論を学んだが、そのころから釈尊の本義や教理に対する根本問題についての悩みが深くなつてきた。

これが主因となつて西域の旅を決意し、国法上許されないまま貞

貞觀元年（六二七）八月、二六歳の青年玄奘は求法のため長途の旅にたつた。密出国であつたため、長安から甘肅省の秦州（今の天水市蘭州（今の甘肅省、省会所在地）、涼州（今の武威）、甘州（今の張掖）、肅州（今の酒泉）、瓜州（今の安西）を経て、玉門関（今の甘肅省西端、以西が西域に到着することすら容易ではなかつた。天山山脈の南東にある高昌（今の新疆省、吐魯番の西）に着いたのは貞觀二年の春で、ここから庫車を経て天山山脈中の凌山（今のハンテングリ山カポベダ山のあたりか）を越え、イシク湖（今のソ連領）の南岸を西に進み、シャーシユ（今のソ連領、中央アジアにおける大都会タシケント）からサマルカンドを経てアム川（オクサス川ともいう）を渡って活国（今のアフガニスタン領）に入り、バルク、バーミヤーンを経てヒンズークシ山脈を越え、印度の西北方にあるカピシヤ、ガンダーラ、カシユミール、ジャーランダラ、クルトの諸国を巡歴し、中印度の南東にあたる釈迦の故郷カピラウアストウ、釈迦入寂の地クシナガラなどにおいて釈尊の聖地を巡礼し、ガンガ河を南に渡って王舎城を都とする摩揭陀国に入つた。

ここにある那爛陀寺は、当時印度における仏教、學術の中心地として、数千の学徒のいる權威ある寺で、玄奘が多年あこがれ夢にまでみた學問の府で、創建以來すでに七〇〇年の歴史をもち、毎日一〇〇余カ所で講座が開かれるという大規模なものであつた。玄奘は長安を旅だつて三年を経た貞觀四年の秋に、この寺の宗匠として仰がれている碩學者正法藏戒賢法師のもとに留學を許され、しかも特別な待遇を受け、寺内の立派な房も与えられ、瑜伽師地論をはじめなどとして顕揚聖教論、俱舍論、梵書、印度論理學、音韻、文法、訓詁などの研學に没頭した。

滞在五年、貞觀九年（六三五）に那爛陀寺をあとにして、東および南印度を経、印度の西北にあるタクシヤシラーに着いたのは貞觀一六年（六四二）の初めであつた。活国から途を東に転じてパミル高原を越えて喀什（カシヤル）にくだり、和田を経、ロプノール湖（今の新疆省東南、羅布泊）の南から玉門関に入り、貞觀一十九年（六四五）、玄奘が四四歳をむかえた正月六日に、一七年ぶりで長安に歸つた。

歸国した玄奘は、そのころ高麗遠征のため兵馬を集めていた太宗を洛陽にたすね、二月一日に儀駕殿で太宗に謁し、歸国の報告と密出国の謝罪をおこなつたが、なんの咎もなく、むしろねぎらいの言葉をうけた。太宗はこのとき、還俗して政務の輔佐を希望したが、玄奘はこれを固辞し、さらに太宗は仏陀の国の見聞を書物に記すように指示した。これが「大唐西域記」の生まれる動機であつた。

三月のはじめに長安に歸つた玄奘は、勅命によつて、太宗が生母のために建立した弘福寺で梵文經典の漢訳と「大唐西域記」の編纂の準備を整え、四月には長安留守司房玄齡の指示によつて、各地の碩學者、字學や梵文の大徳が集まり本格的な漢訳が開始された。

貞觀二〇年（六四六）七月一三日には、一三〇余カ国の見聞を記した「大唐西域記」一二巻が完成し、これにそれまでの經典の翻譯すなわち顕揚聖教論、菩薩藏經、仏地經、六門陀羅尼經の四部をあわせて五部五八巻を太宗に献上した。このとき玄奘は、漢訳經典に対する経題とその序文の起草を懇請したところ、太宗は快く承諾したが政務にせわしくてその約束を果さずにいた。玄奘は翌年も、もっぱら訳経に没頭した。

貞觀二二年（六四八）の春に、太宗は長安の北方の山間にある離宮、すなわち玉華宮に御幸して暑を避け静養していた。玄奘はこの

年の五月一五日に、若年のときから特に心をかけていた 伽師地論一〇〇巻の翻訳が終わり、六月には玉華宮に滞在の太宗からの招きをうけ、そこで太宗は再び、還俗して政務の輔佐を懇望したが、玄奘は釈尊の遺法を明らかにすることが私の本分であると述べて辞退した。玄奘はここに滞在中、重ねて経題とその序文の起草を請うたところ、太宗は八月四日に自ら筆をとって、総字数七八一字の名文「聖教之序」を書きあげ新訳経論の巻頭をかざることになった。

この経題とその序文を、ときの皇帝太宗から賜わったということ、内部に火のような気魄をつつみ剛烈と評された英主太宗と、命をかけて仏法の真義を求め、仏典の漢訳に全生涯をささげた偉人玄奘との、相互の信頼と尊敬を基調とした真実な心の結合とその感動に由来するものであって、新しいものを造り出す基本的な条件とすすなおな発想を、ここに認めることができるのである。武人として戦陣の間に人となった太宗であったが、碑文にみるように文章は雄渾であり、またその筆跡もみごとなものであったといわれている。翌五日に、玄奘は表を奉って謝意を述べたところ、これに対して次のような六三字の勅答があった。すなわち

朕才謝珪璋。言慙博達。至於内典。尤所未聞。昨製序文。深爲鄙拙。唯恐穢翰。墨於金簡。標瓦礫於珠林。忽得來書。謬承褒讚。循躬省慮。彌益厚顏。普不足稱。空勞致謝。

この勅答は「雁塔聖教之序碑」には刻されず、「集字聖教序碑」の一三行めに刻され、また清の王昶の「金石萃編」巻四九、唐九にも記されている。

当時、皇太子であった高宗は、この序とほぼ時を同じくして、総字数五七九字の「述聖記」を認めて玄奘に与えた。これが「聖教序

記」で、玄奘は啓を奉って謝したところ、これに対して次のような五〇字の令答があった。すなわち

治素無才學。性不聰敏。内典諸文。殊未觀攬。所作論序。鄙拙尤繁。忽見來書。褒揚讚述。撫躬自省。慙悚交并。勞師等遠臻。深以爲愧。

この令答も勅答と同じように「雁塔聖教序碑」には刻されず、「集字聖教序碑」の一三行めに刻され、また「金石萃編」にも記されている。

貞觀三年（六四九）五月二十七日、太宗は五〇有二歳をもって、終南山の翠微宮で崩御され永徽と改元された。永徽三年（六五二）に、玄奘は西域の摩揭陀国の塔婆の制にならって、慈恩寺の西院の近くに五層の磚塔を建て、印度から持ち帰った経像を安置して火災の難やその散逸を防いだ。この塔は博表土心のために五〇年ばかりを経て頽毀したので、則天武后の長安年間（七〇一―七〇四）に、現存する形のものに改築されて大雁塔とよばれるようになった。雁塔というのは塔婆のことで、雁を埋めて塔を建てたという西域の故事によるものであるという。改築にあたっては一辺が約二五メートルの方形の基壇はそのまま用い、七層で各層には短い周簷をめぐらした高さ六四メートルの磚塔とした。唐が亡びて長安凋落のちは、慈恩寺の堂宇も廢毀しつつ宋・元を経、わずかに大雁塔を残すのみとなった。明の万曆中に、尚書溫純がこれを重修し塔内に二四八段の木製の階段も別に設けられ、七層までの昇降はいまでも自由である。

盛唐の詩人岑参（七一五―七七〇）は、この磚塔に登って「興高適薛據同登慈恩寺浮圖」と題して五言古詩を次のように詠じた。

(二) 二句中の七句めから四句)

四角 礙二白日一

七層 摩二蒼穹一

下窺 指二高鳥一

俯聽 聞二驚風一

また杜甫(七二二七七〇)は、「同諸公登慈恩寺塔」と題して、同じく五言古詩を次のように詠じた。(二) 二句中の一句めから四句)

高標 跨二蒼穹一

烈風 無二時休一

自非 曠二士懷一

登茲 翻二百憂一

このような詩によつて、日本からの留學僧として法相宗の開祖として名高く、高宗の永徽四年(六五三)に二五歳で入唐し、玄奘に直接教をうけた元興寺の道昭、また数年おくれで長安に入りその教をうけた觀音寺の智通・智達、あるいは真言宗の開祖で諸学の先覚者として、また書や詩文に卓越し、徳宗の貞元二〇年(八〇四)に三二歳で入唐した空海などはいうにおよばず、当時求法のため海を渡ってきた多くの留學僧が、はじめてこの高塔を仰ぎみたときの凜然とした気持ちのほどを推察することができる。

顯慶二年(六五七)に、高宗が洛陽に趣いたので玄奘もこれにしたがい、四五年ぶりに生地を訪れ、同三年に帝とともに長安に帰った。そのころ高宗が皇太子のために皇城の西南延康坊に建てた西明寺ができあがり、玄奘はその上座となつた。この西明寺は、のちに近江の梵釈寺の永忠が一〇余年も滞在し、また空海や高岳親王などの留まつたところで、わが国と縁の深い寺である。

顯慶四年一〇月に、玄奘は大般若經の全訳を行なうため經典翻訳の大徳や弟子とともに、長安を去つて玉華寺(永徽二年九月に玉華宮が廢されて寺となつた。)に移つた。三年有余の歲月を要して龍朔三年(六六三)一〇月、最後の頌を訳し終わり、玄奘はその旨を奏して御製の序文を請うた。

婦朝以来二〇年近くのあいだ訳經に精魂をかたまひ、後述する「玄奘法師塔銘」の六一行めに、「翻經論合七十四部總一千三百二十八卷」とある膨大な經文を漢訳しおえた玄奘は、麟徳元年(六六四)二月五日の夜半、玉華寺において六三歳の生涯を終えた。樞は玄奘ゆかりの慈恩寺の翻經堂に移され、四月一四日に長安の東、渭水の支流である澧水の東方に葬られた。没後五年の總章二年(六六九)四月八日、高宗の勅命により、墓所を長安の南約一〇キロ、樊川の北原にあらため五層の磚塔を建てて祀つた。これが現在の興教寺玄奘塔で、塔内には唐の文宗開成四年(八三九)に、沙門令檢による一行約四二七六行、全字数三、二〇〇字に近い「玄奘法師塔銘」がある。今からおよそ一、三〇〇年前に建てられたこの塔は、慈恩寺大雁塔の七層、はるか終南山を臨んだ方向に玄奘の偉業をしのびせるかのように、いままなお静かにそびえている。

既に述べたように、貞觀二年八月四日に「聖教之序」が、まもなく「述聖記」がつくられ、永徽三年には慈恩寺に五層の磚塔が建てられたが、その翌年、すなわち永徽四年一〇月一五日に、新訳經論の卷頭をかざつた「聖教之序」は審遂良の楷書によつて黒大理石刻され、つづいて一二月一〇日に同形同大の黒大理石に「述聖記」が刻され、塔の上層石室の南面に両碑を収めた。

したがつて「大唐三藏聖教之序」および「大唐三藏聖教序記」の

両碑は、当初作成された貞観二二年には、新訳経論の巻頭をかざった経題とその序文であったが、それが五年を経た永徽四年に、玄奘の訳経が広く永く天下に流布宣揚され、経文の功德の窮りなきことを望むとともに、玄奘の偉大な功績をたたえて、この序記を右に刻し建立したものである。だから詳しくいえば、「聖教之序記碑」というべきであるが、多くの場合碑石の保存されている塔名をつけて「雁塔聖教之序」といい、また寺の名を冠して「慈恩寺聖教之序」といつている。こうした呼び名は、二つには王羲之の「集字聖教序」と区別するためでもある。

太宗の序碑は、右から左に行をおい、高宗の記碑は左から右に行をおって刻されている。つまり序と記とは、行の進め方を計画的に逆にしたもので、これは塔内の石室に並び建てたとき、中央からみて左右相称に展開する両碑の調和を意図したものである。

序碑の題額は八分で、「大唐三藏聖教之序」と四字二行、本文とともに右から左に行をおい、本文は一行四二字の二二行である。記碑の題額は篆書で「大唐三藏聖教序記」と四字二行、本文とともに左から右に行をおい、本文は一行四〇字の二〇行である。両碑の題額の下部には、仏菩薩四天王を刻し、碑底には、天人舞楽の図が刻され、碑陽の左右には蔓唐草の縁模様が刻されている。

両碑はともに、碑身約一九〇センチ、これに碑額を加えると二八〇センチに余り、幅は底辺で約一〇〇センチ、頂辺で約九〇センチ、基石の一辺は約一二〇センチ、その高さは約四〇センチという豊碑である。碑文と一字の大きさは、序碑の縦がだいたい二・二―二・五センチ、横は二―二・三センチの長方形で、記碑の方は、縦横ともに序碑のそれよりも二―三ミリずつ大きい。

両碑は、密達良の円熟した晩年の作であることばかりではなく、その書そのものも彼の生涯を代表する傑作であるとされている。

る。すなわち点画は一般におだやかで円味をもち、また筆で紙を深く耕やそうとするような、意欲的な筆意を感ずることが出来る。線は瘦健で粘り強く、清純で柔軟な味わいをもっている。

造形は漢字の特徴にしたがって横よりも縦が長く、一字一字は、空間の筆意と大きな呼吸とによってふところが大きく、余韻と余情をかもしだし、おだやかでひき締った趣に統一されている。また用筆法は古法に徹して、しかも新しいものを意図し、何のこだわりもなく運んだ筆は変転自在で、その変化の多様と情趣の豊かな点では傑出した作品であるとともに、空間の筆意を重んじているので、空間への想像範囲が広く、その想像が芸術的な高さとなって見るものに共感を与えている。

さらに、密達良の楷書には隸法が用いられているといわれているが、聖教序・記の原碑や法帖を通して、形の上で特に目だつ隸法は、たとえば、序碑の四行め「十方」二行め「密達良」の「方・良」などの第一画の曲げ方、同じく五行め「妙道」、二行め「驚砂夕起」の「妙・砂・夕」などの左払いの終筆、あるいは記碑の、二〇行め「右僕射」の「射」の篇の左払いなどをあげることができる。こうした隸法は、密達良独自の書風をつくる一つの要因となっている。

序記碑の本文の書風は、個性的な香りが豊かで、堂々たる気品に満ちた変化百出の躍動美と、さわやかな颯爽美の妙境は、時代と官位に絶好の地位を得た密達良その人と、その智的な才分と、天才的な感覚によって欧虞二家の長を兼取し、楷書の新生面を創始したもので、その書風は薛稷、薛曜や殷玄祐などを経つつ、しだいに天下を風靡して欧虞の正統を交移させていった。

序碑の題額の一文字の概形は正方形に近く、瘦勁な直線を主調とし、八分隸のおもかげを残して力強い気品をもっている。筆勢も

流麗ですつきりとしたまとまりと安定感が表現され、特に「教・序」の形象、および「之」の第一、二画の構成などの裝飾的な効果は、快よく魅力的である。全体として、知性的で楷書に近い莊重美を發揮している。

記碑の題額は、太細の変化のない篆書独得な曲線と直線とが、巧みに組みあわせられ、沈着でしかも流暢な筆づかいによって、均整のとれた文字が構成されている。空間は広く豊かで、静的な美の造形が主体となっている。立体感をもりあげ、全体として気宇の大きい堂々たる風格美と高い氣品を備えていて、篆額の代表的なものである。

前述の序記碑の隸法が、何によっているのかということは、現在のところ資料が不足して断定し難い。しかし、次の三点なその隸法に多大な影響を与えたといえることができる。すなわち

第一 褚遂良は虞世南の死後、その後継者となって太宗の書に関する事業の管理者として、古書跡を見る機会が多かつたということ。またその研究や法帖の鑑定などによって、古人の質と現代の華とを調和させようとしたこと。

第二 太宗が行書の碑を書いたことによって、碑書に対する觀念が一新したので、褚遂良もその影響によって、帖法を碑法にとり入れたということ。

第三 褚遂良が従来の碑書にしたがいがながらも、つねに自己の特徴をみつめ、独自の境地を切り開こうとして、新しい書風の創造を意図していたということ。

最後に金石文と書の考証的研究について述べ、この小論をまとめたい。殷周時代の古器の銘文、あるいはそれ以後の石刻の原碑や旧拓本、たとえば本稿の「雁塔聖教序記碑」同じく褚遂良の書になる

「房玄齡碑」などは、いまから一、三〇〇年ばかり前に建てられたものであるが、甲骨文・金文というような古代文字になると、それになると、それらは、いまからおよそ四、〇〇〇年ばかり前の記録である。この古代文字をはじめとし、他の多くの金石文やその拓本などを資料として、いわば文字学者が、これに文字学の研究資料を求め、史家が、これによって歴史上の事実を探求し、篆刻家が、鏤印・封泥・瓦当・秦權その他多くの碑文字に、篆法、章法、布白の法を求めているのと同じように、書においても、書そのものや、書の歴史、あるいは書学の昇降盛衰などを、この事実を求めることによって、はじめてその研究の目的が達成されるのである。

したがって、金石学が意図する実事求是の考証的な研究を積み重ねることによって、現在の書のあるべき姿、あるいは教育の場における書が如何にあるべきかというその方向あるいは目標、さらにはその目標を達成するための方法をも、おのずから発見することができるであろう。書写や書道の教育とは、およそ無縁な展覽会主義に埋没して憂き身をやつし、書そのものや書教育の危機に対する認識や批判の乏しい現状においては、特に書そのものの基本的な研究と書写・書道教育の理論化に対する計画的な組織的な研究とその積極的な努力が必要である。

(福岡教育大学)